

コレクターとそのコレクション

丸山治郎

□はじめに

私がここで考えているコレクターとは、購入作品を自宅の適所に飾って楽しむといった少数作品のコレクション所有者は除外し、少なくとも一〇点以上を、すでに所有し、今後とも作品収集を続けようとする人々である。

美術品に限らず、ものを集めるコレクターは数多く存在する。絵葉書・玩具・石・植木・ラベル・切手・生地・道具類・古書・昆虫などなど。それらを蒐集したコレクターの多くは、そのコレクションの持つ、放つ、美や個性に惹かれての場合が大多数であろう。

□趣味は個人的なもの

しかし心得ておくべきは、趣味とか、好みとか、その価値判断は、全く個人的なものだということだ。絵画だって形の無い絵には全然興味を示さない人もいるし、形があってもなんだか判らないものも同じである。ノーマルなものが生まれ、アブノーマルなものは好まれない。夫婦だって好みが全く違うし、多くの場合、家族は理解しないどころか、コレクターの意思に反し、しばしばコレクション形成を妨害する。

夫婦そろってなんていうのは、数多くコレクターと付き合っている私でも、あまり見かけない。

極少数派である。それもあってか自分の趣味のため、単身を貫いた人もいる。また企業経営者ならいざ知らず、一般サラリーマンなど、その給与所得など総額を把握され、家族にはガラス張りである。集合社宅に住んでいるならなおさら、他の家族と比較され大変なことになる。

□家族の協力を得るには

家族を自分の趣味に引きこむには、啓蒙や、家族サービスが大切で、それ相応の財産、余暇の配分も怠れない。それを怠るとウラミ・ツラミが増幅し、当人の死後コレクションは家族によって叩き売られてしまうという結果になる。実際に私もその現場を目撃してしまった。

家族どころか同じ趣味の仲間でも他人のコレクションには冷やかである。まして投資とか利殖とか、間尺に合わないのが美術コレクションの通例である。テレビの「鑑定団」に登場するコレクターの失敗例を笑えない、始めからそう考える方が間違っている。

ある画商は、顧客（コレクター）が亡くなると、殆どの顧客の家族が、作品を自分の買った店に持ってくれば、損も少なくて済むのに、他所の店に持ち込み、二束三文で処分していると私に話してくれたが、家族にとってみれば自分の主人に、言葉巧みに作品を売りつけた画商は、憎むべき敵であろう。コレクションの多くはコレクターの死後、家族によって打ち捨てられる運命にあり、こうして個人コレクションは、当人の死をもって無に帰すこととなる。コレクションは通常当人だけのもので、家族に引き継がれるものはごく稀である。最近のオークションと称する収集美術品の処分風景は喜んでばかりおられない。

□コレクターとそのコレクション

また美術コレクターも様々で、王侯貴族や、歴史に名を残す大コレクターから、末端のサラリーマンコレクターまで数多いが、ここで取り上げられるのはそういった成功物語とは無縁の小市民コレクターの話である。そのコレクターと呼ばれる人の職業もまた様々である。一例をあげれば、学者・医師・弁護士・教師・画家・画廊経営者・作家・実業家・建築家・投資家・サラリーマンと、これもまた多種多様である。

コレクションは目的を自覚して始めることが肝要である。誰でも収集当初には目的があったはずである。それを曖昧にして、なんとなく始まったコレクションは、作品もバラバラで、当りさわりのないものとなり、なんとなく終わるのが通例である。

そのコレクションの目的もその人によって実に様々である。自己満足のためとか、美術の研究のためとか、コレクションを公開（美術館を開館）するためとか、衰退した美術の分野の再検証のためとか、公美術館の収集をサポートするためとか、利殖のためとか、趣味を共有し仲間と交歓するためとかよく聞く事例である。

私の場合、種々の理由で実現できなかったが「浮世絵美術館」に対抗して、私立の「現代版画美術館」を立ち上げるのがコレクションの動機であった。版画ならサラリーマンの私でも、場所さえ確保できれば可能との判断であった。そのための準備に、美術史や、作家研究や、版画の技法習得、購入対象作品の選別など、一九六〇年から一〇年近くかけている。この時期の美術資料の収集と作品調査が私の生涯の仕事になると同時に、美術ジャンルにこだわらない様々な傾向の作品収集につながったと考えている。

版画コレクションの開始は一九七〇年前後であったが、版画は複数制作であるので、その点受賞作でも時間を経ての購入が可能であった。こうして始まった私のコレクションの第一号は木版画家の黒崎彰である。遡って《WORKY》からのコレクションであった。ついで日和崎尊夫・野田哲也と続くことになる。こんな私のコレクションを、家族は「ガラクタ・コレクション」という（勿論家族がいうこの「ガラクタ」とは心情的なもので、作家や作品を指しているものでないことはいうまでもない）。

こうした私の版画のコレクションは、いつしか自覚の無いままに私の美術を見る目を、具象から抽象に変えていった。版画は当時、国際展で受賞を争うほど、わが国の美術の分野で最も先鋭であった。私の現代美術開眼は版画収集によってもたらされたといっても過言ではない。現在の私の現代美術を中心としたコレクションのスタートである。

公立の現代版画の専門美術館である町田市立国際版画美術館の開館は実に一九八七年のことであった。

□コレクションの手法

時間を掛けて系統的に作家を、作品を、選別し集めているうちに、版画作家には版画のみの専門作家と、版画を表現のひとつと位置づけて活躍している作家が存在していることに気づくことになる。その前者には日和崎尊夫・黒崎彰・野田哲也・中林忠良・木村光佑・多賀新らがいて、後者の作家には、坂本善三・山下菊二・草間彌生・李禹煥・菅木志雄・高松次郎・上矢津・浜田浄・上智祐・松谷武判・川俣正らがいた。これらの後者の作家は版画の領域拡大や、新表現に積極的に関わっていた。これがきっかけとなって私のコレクションは、版画以外の現代美術にも拡大してゆくこ

とになる。

さて目標を定めてスタートしたコレクションは、無理をせず、相場に走らず、心を閉ざさず、眼を開いて、個々の作品を選び、そして持続的に収集することが肝要である。

上記の無理をせずということは、特に大切で、私はいい眼を持ち合わせながら自己破産して撤退したコレクターを数多く知っているからである。自分の甲羅に合わせたコレクション、日常生活を維持し将来を見据えたコレクション、最近の経済の変動を見るにつけ、資金繰りに常に余裕を持つことなどに心がけたい。はじめから作品購入のサイクルを半年に一点とか設定するのも一方法である。場合によってはコレクションを一時中断するなど必要であろう。

前にも述べたが、投機的なコレクションは割に合わないのが絵画取引の通例であり、慎むべきである。

□ 絵を見る眼を養うには

全ての絵画作品は形があるか、無いかによって先ず分かれる。例えば形がある風景画の場合、眼前の風景を細密に、見たまま描いたとしても、その出来栄や、技術の素晴らしさを賞味することはあっても、何も感動が湧かない。カメラのシャッターを切ったのと大して変わらないのである。何がどう描かれたかが大切である。眼前の風景を参照して自己の内部に取り込み、自らの心象をかさねて表出した風景は、見る者の共感をよぶ。

またそれを読み取る自身の心眼を開くことは、良質のコレクションを形成するのに欠かせないことである。音楽は耳で、肌で、感じ聞きとるものであるが、絵画は眼で見るとあることを忘れてはならない。その眼力の差はどうして生まれるか。数多く絵と接すること（私の場合、日常的な画廊廻りが役だっている）、絵を見るに心を開き、素直に接すること、固定観念を持たないこと、自分の殻に閉じこもらないことなど心掛けることが肝要である。

□ さいごに

私はコレクションの最初から、自分と同輩か、自分より年下の作家の個展で作品を選ぶことを大切にしてきた。したがって私より年上の、いわゆる物故作家のコレクションが少ない。よほどのものでないと見向きもなかったからだ。私の経験から、若手の個展の作品の中から良質のものを選ぶのが一番確かなようである。

私のコレクションはジャンルを問わない。振り返ってみて、私の心に触れるものを大切にして、情緒や、素朴さや、感動を大切にしてきたように思う。価格が高い、身の丈に合わない有名人の作品は、意識的に購入を避けた。また格安であっても並品は買わないことに徹した。私のコレクションには高価なものはない。作家の美術史上にのこるような作品も見当らない。私好みの作品が全てである。

二〇一一年一月二日

(まるやま・じろう／コレクター)

- 1 コレクターが三五名集まってコレクションの本を出す。過去に事例は無く、初めての試みです。
- 2 「コレクション展に出品する」「会誌にご自分の作品を紹介する」「本に投稿する」。これはコレクターの自己表現、自己実現です。
- 3 多くの作品の中に自身のコレクションを置いて見る。好みのコレクションも比較するとその作品のレベルが明確になります。これは一種の他流試合です。
- 4 コレクションは好みでもありません。それゆえにコレクションには特徴が、味が出ます。又、コレクションはコレクターの人格です。

NPO法人あーと・わの会の一〇周年にあたり、野原理事長を中心として記念事業を検討してきました。選ばれたのはコレクターの図書の発刊でした。

さて、出版に当たってアンケートを取りましたが低調でありました。早速、対策を図りました。

- 1 図書出版に無理はしない。二年強の時間をかけました。
- 2 書籍プロジェクトを設け、プロジェクト・リーダーを平園賢一さんをお願いし、
- 3 日頃から図書への投稿を呼びかけてきました。

リーダーの下、物故作家の作品掲載を中心とする等の基本方針を早めに発信しました。

しかし、二〇一一年九月末の締め切りにどれ位の作品が投稿されるか未知数でした。蓋を開けて三〇〇点を越える投稿にびっくりしたものです。自費出版の場合、一点の出品でも自腹を切る（出費）という壁を越えて出品されています。会員の皆さんの心意気を感じたものです。

絵とコメントを一ページずつ一セットとする掲載では、本の厚さから紹介できる作品数に制約が出てきます。一冊、一五〇点前後が目標となりました。さて、三〇〇点の投稿作品を一五三点に選抜することは難しい選別作業でした。

考慮すべき基準をもうけ、私心無く、公平に実施しました。

「わの会」ではコレクション展を一〇回実施。都度、画集も作っています。会誌発行は四九号を数えます。

手作りのノウハウは内部に蓄積されています。しかし、一般図書の発行には高度の編集技術が必要です。書籍プロジェクトに編集のプロの中山ゆかりさん、斉藤博美さんを迎え、完全入稿まで内製化を図りました。

NPO法人あーと・わの会のご案内

I 設立の趣旨（設立趣意書より）

この法人は、主に美術コレクターとわたくし美術館の共同作業により、一般社会に対して、美術品の公開、美術品の有効活用、埋もれた美術品の発掘顕彰に関する推進とその支援事業を行い、美術普及の実現に寄与することを目的とする。

II 具体的な活動内容

- 1) 質の高いコレクションの公開、美術普及活動の推進及び表彰
年1回の巡回展、年1人の表彰。
- 2) 講演会の開催
年1～2回開催。
- 3) 埋もれた作家の発掘、顕彰、普及
コレクター、わたくし美術館が実施。
- 4) ホームページ（HP）による活動状況の公開
1～2か月に1回更新。
- 5) 作品持ち寄り放談会の開催
年4回実施。楽しい会です。
- 6) 会誌・図書の発行
会誌／年4回発行。
- 7) 上記の目的を達成するために必要な事業の実施
会報／毎月発行。

III 設立：2010年8月17日 法人登録

（*前身の「わたくし美術館の会」は、2003年5月設立。通算13年目）

- ### IV
- 1) 会員数：71名、15美術館（2015年5月現在）
 - 2) 会員の構成：わたくし美術館15館、コレクター50名、作家、画廊、美術愛好家、美術研究者、修復家、額縁製作者、美術普及家、美術館設立準備者3名

V 入会

入会の条件：入会申込書を提出いただきます。

*詳細については事務局宛に手紙、電話かメールでお問い合わせください。
HPも参考にしてください。

事務局：〒277-0871 千葉県柏市若柴1-358 柏わたくし美術館内

TEL：04-7134-8293

メールアドレス：ryokehori@yahoo.co.jp

VI 会費

入会金：10,000円

年会費：10,000円（11月以降入会の場合、初年度は半期分として5,000円）

書籍プロジェクトを推進する中で多くの幸運にも恵まれ計画は順調に進みました。

1 図書発行が一〇周年記念行事に選ばれました。

2 会員の皆さんから約三〇〇点もの珠玉の作品の投稿がありました。

3 土方明司さん、丸山治郎さんには玉稿を賜りました。

4 東御市梅野記念絵画館の佐藤修館長から特別なご配慮をいただき、代表作品をお寄せいただくことが出来ました。

5 丸山治郎さんのご紹介で、お二人のプロ編集者の協力を得ることが出来ました。

さて、日本絵画の代表作等の宝物は、国立美術館、県立美術館、市町村美術館そして大原美術館、ブリヂストン美術館等にありますが、コレクターのコレクションには、また違った魅力があります。

1 高名大家の作品は多くありませんが、公立美術館の所蔵作品と比較しても遜色ない作品群

2 埋もれた作家、発掘顕彰された作家の作品群

3 思いの丈で集めた個性溢れるコレクション群

等、様々な作品群がこの図書の特長だと考えています。もちろん、その評価はこの図書をご覧いただいた読者の皆様に委ねたいと思っております。

本書を発行するに当たって多岐にわたる方々のご支援を賜りました。この場をお借りして御礼申し上げます。

（ほり・りょうけい／書籍プロジェクト事務局）

* * 作家索引 * * * * * * * *

【あ】	大塚 武 《ベニス》 238	【け】	【す】
相原求一朗 《厳冬旭岳》 272	大橋エレナ 《パリの公園》 88	解良常夫 《春光》 270	菅 創吉 《出会い》 242
麻田 浩 《花》 244	大橋了介 《サンパウロ》 90		菅野圭介 《哲学の橋 (ハイデルベルク)》 18
	小川千壘 《岩倉村》 38	【こ】	《静物 (飛驒の箆笥)》 202
	奥村光正 《コルシカ風景》 248	小泉 清 《裸婦》 216	須田輝洲 《静物 (枇杷とキャベツ)》 32
網谷義郎 《二人》 228	小山田二郎 《人間形態》 214		須田国太郎 《二匹の馬》 208
荒井龍男 《或る風景 (於パリ)》 96	恩地孝四郎 《池畔 (台湾風景)》 74		砂澤ビッキ 《木面》 320
		小出三郎 《人》 230	
安藤信哉 《対話》 212			《箱根駒ヶ岳》 232
	【か】	児島善三郎 《鏡を持つ女》 114	【せ】
【い】	桂 ゆき 《みみずく》 172	児島凡平 《自画像》 164	清宮質文 《少女》 178
板倉 鼎 《黒いショールの女》 42	金山平三 《釜屋濱の岩》 190	二世 五姓田芳柳 《新羅征伐の吉凶をトす》 52	《雨後の貯水池》 180
井上長三郎 《浜辺》 152	金子周次 《入港》 252	小寺健吉 《初秋の湖畔》 60	【そ】
伊庭伝次郎 《女学生》 154	河合新蔵 《十和田湖ブナ林》 80	後藤工志 《甲州風景》 56	相馬其一 《ヴェニス風景》 84
今西中通 《フサ像》 122	川上邦世 《魔驅》 310	小堀四郎 《谷中風景》 76	
岩崎巴人 《河童まんたら》 285	川島理一郎 《ナポリ・ポッツオリの岡》 102	駒井哲郎 《笑う幼児》 258	【た】
		小松義雄 《岩と海》 170	高島野十郎 《壺とリンゴ》 136
		古茂田守介 《少女像》 174	高野卯港 《美術館レストラン》 298
	【き】		武井直也 《女の首》 312
【う】	菊池一雄 《若い女日》 316		武内鶴之助 《溪流》 92
宇都宮周策 《ふるさと内子》 116	菊地又男 《メキシコの夜》 296		竹久夢二 《一座の花形》 22
梅野木雨 《自像》 290	喜多村知 《海近く》 234	【さ】	建島大夢 《井原氏の顔》 314
	北村四海 《イヴ》 302	斎藤与里 《少女像》 46	田中 保 《静物》 44
【え】	北村正信 《若い女》 302	里見勝蔵 《シャボンバルの寺》 100	田淵安一 《三天界》 260
瑛 九 《旅人》 200	木田金次郎 《晩秋風景》 188	真田久吉 《静物》 48	玉之内満雄 《水辺の古城》 274
	鬼頭 曄 《酔いどれ天使》 288	佐分 眞 《セーヌの初秋》 120	
	木村莊八 《牛肉店階上》 184	澤田利一 《マジョリカ壺の白百合》 268	
【お】	【く】	【し】	【ち】
大沢昌助 《無題》 262	楠 瓊州 《寒光山水図》 192	品川 工 《フタリ No 2》 294	鳥海青児 《黄色い人》 198
	国吉康雄 《裸婦》 134	芝田米三 《黒い道》 206	
	栗原忠二 《緑蔭の牧場》 86	島崎翁助 《白牡丹》 162	【と】
大沢鉦一郎 《裸の自画像》 66		下村良之介 《作品》 222	遠山五郎 《赤いシャンタユ》 98
大沢鉦一郎 《小さい椅子》 68			
太田聴雨 《愛陶》 182			

*** 所蔵家・執筆者一覧 ***

【の】	川上邦世《魔驅》	310	峰村リツ子《X氏像》	168	【や】	
野原 宏（のはらひろし）	武井直也《女の首》	312	小松義雄《岩と海》	170	山瀬一洋（やませかずひろ）	
小川千甕《岩倉村》	建島大夢《井原氏の顔》	314	小泉 清《自画像》	218	国吉康雄《裸婦》	134
森田恒友《風景》	菊池一雄《若い女B》	316	三上 誠《作品》	220	高島野十郎《壺とリンゴ》	136
板倉 鼎《黒いショールの女》	砂澤ビッキ《木面》	320	下村良之介《作品》	222	【よ】	
田中 保《静物》			中村義夫《早春薄暮》	226	横山俊樹（よこやまとしき）	
斎藤与里《少女像》	【ふ】		網谷義郎《二人》	228	真田久吉《静物》	48
荒井龍男《或る風景（於パリ）》	福井 豊（ふくいゆたか）		鬼頭 曄《酔いどれ天使》	288		
広本季與丸《青い服》	牧野義雄《夜のピカデリー・サーカス》	78				
吉岡 憲《漁村》	河合新蔵《十和田湖ブナ林》	80	【ま】			
荒井龍男《朱の中の朱（イピラプエラ）》	矢崎千代二《ボン・ヌフ》	82	増田一郎（ますだいちろう）			
鳥海青児《黄色い人》	相馬其一《ヴェニス風景》	84	増田 誠《オー・ボン・ロワン・ピストロ》	276		
瑛 九《旅人》	栗原忠二《緑蔭の牧場》	86	永田精二《静物（果物）》	278		
菅野圭介《静物（飛驒の箆笥）》	大橋エレナ《パリの公園》	88				
菅 創吉《出合い》	大橋了介《サンパウロ》	90	松尾陽作（まつおようさく）			
麻田 浩《花》	武内鶴之助《溪流》	92	二世 五姓田芳柳《新羅征伐の吉凶をトす》	52		
梅野木雨《自像》	三井良太郎《ブリーズ・ミシェ通り》	94	渡辺與平《静物》	54		
	玉之内満雄《水辺の古城》	274	後藤工志《甲州風景》	56		
【は】			丸山晚霞《ヒマラヤと石楠花》	58		
櫛川公子（はせがわきみこ）	福田豊万（ふくだとよかず）		中西利雄《ジャルダン・テュルリー》	144		
宇都宮周策《ふるさと内子》	山本 弘《赤鬼》	240	藤田嗣治《兎》	146		
【ひ】	【ほ】		丸山治郎（まるやまじろう）			
平園賢一（ひらぞのけんいち）	星 裕典（ほしひろのり）		中村正義《建築中の家》	24		
遠山五郎《赤いシャンタユ》	長谷川利行《大和家かほる》	130	星野眞吾《昇（鳥の子紙による作品）》	26		
里見勝蔵《シャポンバルの寺》	長谷川利行《安来節の女》	130	山下菊二《両鳥》	28		
川島理一郎《ナポリ・ポッツオリの岡》						
中山 巍《老人像》	堀 良慶（ほりりょうけい）		【み】			
二見利節《傘屋》	矢崎千代二《アラビア丸にて》	150	三浦 徹（みうらとおる）			
本荘 赳《山羊小屋》	井上長三郎《浜辺》	152	小出三郎《人》	230		
北村四海《イヴ》	伊庭伝次郎《女学生》	154	菊地又男《メキシコの夜》	296		
北村正信《若い女》	仲田菊代《白い壺のバラ》	156	高野卯港《美術館レストラン》	298		
戸田海笛《曠野》	中間冊夫《女性像》	158	正木 隆《造形 01-8》	300		
土方久功《マスク》	山本 正《女医》	160				

*** 所蔵家・執筆者一覧 ***

【あ】	相原求一朗《厳冬旭岳》	272	金子周次《入港》	252	【た】		
新井 博（あらひひろし）			山縣 章《蓮沼海岸》	254	棚橋 章（たなはしあきら）		
古茂田守介《裸婦二人》	176	小倉敬一（おぐらけいいち）			福地敬治《山村》	256	
清宮質文《少女》	178	林 倭衛《静浦風景》	138	小山美枝（こやまみえ）			
脇田 和《パン屋の子》	280	野口謙蔵《暮れる》	140	大塚 武《ベニス》	238	谷 吉雄（たによしお）	
		長谷川隣二郎《正倉院附近》	142			林 倭衛《プロヴァンスの森》	118
【い】		桂 ゆき《みみずく》	172	【さ】		佐分 眞《セーヌの初秋》	120
伊とうはるこ（いとうはるこ）		古茂田守介《少女像》	174	佐々木征（ささきせい）		今西中通《フサ像》	122
宮下まさつら《関に立つ天女》	292	清宮質文《雨後の貯水池》	180	御園 繁《伝副島種臣像》	30	柳瀬正夢《風のある海景》	124
品川 工《フタリ No 2》	294	太田聴雨《愛陶》	182	須田輝洲《静物（枇杷とキャベツ）》	32	松本竣介《少女》	126
		木村莊八《牛肉店階上》	184	山本森之助《中禅寺湖の暮雪》	34	長谷川利行《少年像》	128
岩本 昭（いわもとあきら）		南城一夫《静物》	186	水木伸一《狎》	36		
竹久夢二《一座の花形》	22	木田金次郎《晩秋風景》	188	松山忠三《テムズ川河口》	110	田部井仁市（たべいじんいち）	
		金山平三《釜屋濱の岩》	190	油井夫山《洗物する少女》	112	松永敏太郎《山茶花を見る女》	266
【う】		星野眞吾《鉄と画鋸》	224	島崎蓊助《白牡丹》	162	澤田利一《マジョリカ壺の白百合》	268
宇都宮義文（うつのみやよしぶみ）							
児島凡平《自画像》	164	【か】		佐藤 修（さとうおさむ）		【な】	
中野和高《式典会場寸景》	166	金井徳重（かないとくしげ）		菅野圭介《哲学の橋（ハイデルベルク）》	18	中村儀介（なかむらぎすけ）	
		藤井令太郎《スタンドグラス》	204	中村忠二《夜の沼》	20	児島善三郎《鏡を持つ女》	114
梅野コレクション（うめのこれくしょん）		芝田米三《黒い道》	206			須田国太郎《二匹の馬》	208
菅野圭介《哲学の橋（ハイデルベルク）》	18	麻田 浩《物たちのおもい》	246	佐藤裕幸（さとうひろゆき）		瑛 九《遊園地》	210
中村忠二《夜の沼》	20	奥村光正《コルシカ風景》	248	中沢弘光《富士山》	50	安藤信哉《対話》	212
		三岸黄太郎《谷あい》	250			岩崎巴人《河童まんだら》	285
【お】				【す】		岩崎巴人《色即是空》	285
太田貞雄（おおたさだお）		【き】		鈴木忠男（すずきただお）			
小寺健吉《初秋の湖畔》	60	木村悦雄・正子（きむらえつお・まさこ）		楠 瓊州《寒光山水図》	192	中村 徹（なかむらとる）	
中村研一《裸婦》	62	恩地孝四郎《池畔（台湾風景）》	74			箕口 博《邪鬼》	282
		小堀四郎《谷中風景》	76	鈴木正道（すずきまさみち）			
小川榮吉（おがわえいきち）		小山田二郎《人間形態》	214	駒井哲郎《笑う幼児》	258	中山真一（なかやましんいち）	
中村研一《読書婦人》	64	小泉 清《裸婦》	216	田淵安一《三天界》	260	大沢鉦一郎《裸の自画像》	66
小出三郎《箱根駒ヶ岳》	232	柳原義達《赤毛の女》	318	大沢昌助《無題》	262	大沢鉦一郎《小さい椅子》	68
喜多村知《海近く》	234			大沢昌助《めばえ》	264	横井礼以《丸鬚の夫人》	70
吉川三伸《冬山》	236	【こ】				横井礼以《秋草と赤蜻蛉》	72
解良常夫《春光》	270	此木三紅大（このきみくお）					

『わの会の眼 コレクターたちの静かな情熱』

発行 NPO 法人あーと・わの会
企画編集 NPO 法人あーと・わの会 書籍プロジェクト
野原 宏 理事長
平園賢一 プロジェクト・リーダー
堀 良慶 企画
鈴木正道 会計
中山ゆかり 編集
斉藤博美 編集デザイン
校正 福井 豊、佐々木征、小松富士男、鈴木正道
発行日 2012 年 6 月 15 日 (初版)
2015 年 12 月 5 日 (再版)
連絡先 NPO 法人あーと・わの会 書籍プロジェクト事務局
〒 277-0871 千葉県柏市若柴 1-358 柏わたくし美術館内
Tel : 04-7134-8293 E-mail : ryokeihori@yahoo.co.jp
印刷 株式会社 総北海
写真撮影 橘 正人〈プロジェクト協力〉
松尾陽作、野原 宏、宇都宮義文、太田貞雄、佐藤 修の出品全作品と
堀 良慶 8 点 (P155、159、161、171、221、223、227、229)、
三浦 徹 2 点 (P231、301)、小川榮吉 1 点 (P271) 計 38 点
表紙 菅野圭介《哲学の橋 (ハイデルベルク)》1953 年

© NPO 法人あーと・わの会 2012, 2015

(*作家、遺族等著作権者の方々には、極力作品掲載のご許諾をいただくよう努めましたが、一部ご連絡先の不明な作品がありました。お心あたりの方は「わの会」事務局にお知らせください。)